

# 思ひ草

第20号

平成28(2016)年7月8日 発行

## 保育は「半歩前の原理」で～「人間開発」の視点から～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



子ども支援学科の学生たちが、たくさんの学びの土産を抱えて幼稚園実習から戻ってきました。実習生たちが、実習期間を通して悩んだことは、総じて言えば、「指導と支援の境界(挟間)」です。どこまでが支援で、どこから先が指導なのか。

小、中学校でも、同様の悩みを持ちますが、幼児教育に携わる「保育」(幼稚園教育も保育)の現場では、特に中心的な課題の一つです。その子の持つ素質・能力の心身の開発に全面的に責任を持つ、という「人間開発」の視点からは、「一歩前でなく、半歩前を」と、提案したいと思います。

子どもに対して、私たちはつい「一歩前」の手助けをしてしまいます。できるだけ、その気持ちを抑えましょう。これが「半歩前の子育て」の精神です。保育の現場で見てください。

前日、園児が積み木遊びをしたとします。彼らは、その続きをしたがります。園児は言います。「せんせい、これ、こわさないで、とっておいてよ。おねがい」。

そこで、先生方は「半歩前の子育て」です。翌朝、それにさらにプラスアルファになるものを、一つ付け加えておきます。例えば、箱を付け加えておくだけで、子どもたちは知的好奇心をさらに沸き立たせ、積み木遊びを発展させます。

しかし、子どもは気まぐれです。次の日には、積み木など見向きもせず、箱を使って遊ばないかもしれません。それで良いのです。これが、子どもの自律を育てる支援、すなわち「待つ保育」です。チューリップの花も、朝は小さくても、昼には大きく開きます。「朝はこんなに小さかったのにね」。園児は花の一日の変化に気付きます。「絵に描いてみようか」。先生は園児たちを誘います。小学校のように「今からチューリップを描きなさい」とは指示しません。ここにおいて、支援と指導とは対立概念ではありません。実は、支援も指導の一つです。

人間開発の精神に基づく、一歩前でなく、「半歩前」でがまんする精神が、幼児の子育てには、とりわけ大切なのです。

## 子育て支援の目指すもの

教育実践総合センター しお や かおり 塩谷 香



初任で保育園長となった1998年、時代は少子化を受け、「子育てと仕事の両立」を目指して、保育サービス事業の拡充が進んでいました。延長・夜間保育はもとより、病児・病後児保育、一時保育、年末保育など様々な保育事業が展開されつつありました。小さな年齢から預けられる子どもたちが増え、保育時間も次第に長くなってきました。残業があっても、子どもが病気になるっても働き続けることができることは保護者にとっては大変ありがたいことではあります。

しかし、子どもにとってはそれが最善であるとはいえない状況があります。子どもの最善の利益を考えたとき、支援はどのようにあればよいのか、必ず子どもの視点から考えられなければならないと思います。なぜなら、子育て支援は子どもが健やかに育つためのものだからです。子育て支援は誰のための何のための支援なのか、本質を忘れてしまっては子どもの最善の利益が失われることにもなりかねません。子どもが家庭で健やかに育つよう、保護者の養育力の向上を目指して行われる支援で

なければならないのです。

そう考えると保育者はあたりまえの保育の知識や技術だけでは対応できません。親子をつなぎ、親と親をつなぎ、親と地域をつないでいく、「人と人とを結びつける力」が必要になります。単なるコミュニケーション能力といわれるものはいうに及ばず、専門家として信頼され、親子にとって子育てを見守ってくれる大きな存在にならなければなりません。そのためには、専門性だけでなく、その人間性が問われることになります。「この先生はわが子を愛してくれている」と保護者が実感したとき、本当の信頼関係が始まるのです。

専門性を支える自分自身の人間性を磨く努力が必要です。失敗を恐れず、様々な人と積極的にかかわる体験を積み上げてください。辛い体験もあるかもしれませんが、それ以上に人と分かち合えた喜びは大きいものです。大いに学び、大学生活を楽しんでください。共に頑張りましょう。

## 教育実践総合センターの主な取り組み

本センターは今年度も、教育実習や教育インターンシップ、教育ボランティア等の「学生支援」、および地域の協定校や教育関係機関との連携等を促進する「地域教育支援」を行っています。

### 保育実習・教育実習

#### 五感のアンテナを思い切り伸ばして

人間開発学部教授 夏秋 英房

実習に行くと、学生は五感をフルに働かせて子どもと関わり、知ろうとする。たとえば、ある女兒のにおいが他の年齢の男児と同じで、しかも話す声がそっくりであることから、この2人がきょうだいであることに気づいたりする。また、実習生と初対面なのにどっと近づいてくる子どももいれば、知らんぷりをしながら次第に寄ってくる子どももいる。さらには照れ屋の子どもや一人遊びを好む子ども、いつも群れ遊んでいる子どもなど、実習生は実にさまざまな態度を示す子どもたちと出会う。

大学の講義で学ぶ発達段階は子どもの平均的な姿を示しているが、実際に出会う子どもたちは年齢が同じでも月齢による発達の差が大きい。不明瞭な音声で表現をする子どももいれば、普通の言葉で話しかけてくる子どももいる。保育室の掲示によって子どもの生まれ月を確認すると、その早い遅いが言語表現とはっきり関わっていることに気づく。

このように実習生は、感覚をととても鋭敏にして子どもと接し、その振る舞いやエピソードを心にとめ、それはなぜなのかと疑問を抱き、実習日誌に記録していく。

保育所では午睡をするが、なぜ5歳児は午睡をしなければならぬのか、と疑問に思う。他の学生と話してみると、5歳児には午睡をさせない園があることを知り、さらにこの疑問は深まる。

実習中に次々と浮かぶこのような疑問を休憩時間などに保育者に伺うと、親身になって答えてくださる。一方、打ち合わせの時間や職員室で保育者が交わす会話を聞いて、保育者がその日の子どもの様子を話し合い共有し、対応策を相談し、園が掲げる目標を協働して達成しようとしていることを実習生は知る。

実習をとおして子どもの姿や保育者の働きにふれ、なぜなのか、どうすればよいのかといった疑問を大切にしながら、大学に戻ってより深い学修に学生は臨んでいく。

#### 失敗から学びへ

子ども支援学科 4年 佐藤 育子

学生生活すべての教育実習・保育実習を終えて、正直ほっとした気持ちと、まだ学びたいと思う気持ちとがある。まだ学びたいと思う気持ちの根底には、失敗を恐れてしまった自分への少しの後悔がある。実習が「失敗してもよい場」であることを、実習を控える後輩たちに伝えたい。

私は、保育所の責任実習で運動遊びを行った。前日まで何度も指導の練習をし、予想される子どもの姿を考えながら準備を整えていたつもりであった。しかし、当日の活動で私の目に映ったのは、予想もしなかった子どもたちの姿であった。自分の持つイメージと、子どもたちの頭の中に浮かぶイメージとの間にズレがあったことに気付いたのだ。その時私は、ただただ焦り、指導の言葉が止まってしまった。うまく活動を展開することが出来ず、落ち込んでいた私に担任の先生がこう言った。「先生がいつだって完璧な存在でいる必要はないんだよ。間違えたっていい。」私は、先生からいただいたこの言葉に救われた。「うまくやろう」「ちゃんとしなくては」という思いが強かった私は、失敗することを恐れていたのだ。失敗したことだけにとらわれるのではなく、大切なのは、失敗から得る学びであるということを知った。

大学での専門的な学びを基礎として、実習ではその学びの理解が深まる。ただ、文字で学ぶだけでは意味がない。自ら考えて、実践してこそ気付きが生まれ、自分に身に付いていくと思う。実践の中ではたくさんの失敗があるが、失敗からの学びは自己の課題を明確にし、次へとつなげていく大切なものである。

5回の実習すべてが私の学びを深くし、将来に対する思いを、より確かで強いものにしてくれた。実習させていただいた園の先生方、職員の方々、子どもたちに感謝の思いを持って夢への実現に向けて精一杯努力していきたい。



## 教育インターンシップ

5月から教育インターンシップが始まりました。参加する学生の数も年々増えてきており、今年度は、子ども支援学科約80名、初等教育学科約80名、健康体育学科約30名の200名近い学生が活動しています。

保育・学校の現場でたくさんの人と関わり、多くのことを学んでいます。

### これからにつながる学び

初等教育学科 2年 竹村 結真

私は週に2回横浜市立新石川小学校で教育インターンシップをさせていただいています。学校現場では日々たくさんのことを学ばせていただいております、特にそのうちの2つを紹介します。

第1は、授業の中での工夫です。子どもが発言するとき、「え〜!? そうしたら今度どうなった?」とリアクションを取りながら発問することで、子どもたちがどんどん手を挙げて発言できるようになったり、自分の考えを書く時間に行き詰っている子がいたら、お手本にするために途中で書き終わった子の発表を行ったりするなど、先生は様々な工夫をしていました。子どもたちのキラキラした瞳を見て、授業は先生の工夫でこんなにも楽しいものにできるのだなと思いました。先生の声かけや工夫によって、子どもたちのやる気や反応が大きく変わるということ学びました。それと同時に、先生の言動には責任があることを強く感じました。

第2は、私が特に印象に残っている出来事です。本を読むのをやめなかった子に対し、周りの子どもたちが乱暴な口調で注意したため、その子は嫌な思いをしてしまったということがあり、先生が話をしました。「自分が怖い口調で注意されたらどんな気持ちになるかな。真剣さを伝えることが大切なのではないかな。」などを子どもに問いかけ、考えさせる時間を取っていました。先生は一方的に話をするのではなく、子どもと一緒に考えながら「思いやり」や「愛情」をもって接することの大切さを伝えていました。私は、このような問題が起こったときの対応の仕方を学ぶことができましたし、何より愛情をもって子どもと接することの大切さを深く感じることができました。

教育インターンシップでの体験を通して、私はここには書ききれないほど多くのことを学ばせていただいています。子どもたちや先生方とかかわる中で、うまく子どものサポートができ、自信につながる時もあり、対応が難しく、自分の力量のなさに悔しい思いをする時もあります。この一年でいろいろな経験をたくさんして、子どもたちの成長を見ながら、自分もどれだけ成長できるかとても楽しみです。

### 経験こそ最大の武器

健康体育学科 2年 小西 真喜

私は今、教育インターンとして母校の中学校へ週に一度行き、主に特別支援教室の生徒の授業補助を行っている。実際の教育現場で活動しその中で一番学んだことは、授業や話を聞くだけでなく、実際に経験しなければわからないことがたくさんあるということだ。

このインターンで一番難しく、また勉強になったことは生徒との接し方である。特に特別支援の生徒達との関わり方は、実際に体験しなければわからなかった。私の従兄弟は重度のダウン症であるため、少しではあるが障がいについての知識をもっていると思っていた。しかし、教室に入って生徒たちと接すると、自分も持っていた知識は障がいのある人々のほんの一部でしかなかったことに改めて気づかされた。一言で障がいと言っても、一人一人の状況は全然違う。学級の中でもコミュニケーションがうまく取れない子、物事を判断することが難しい子、集中できず落ち着きがない子など様々な生徒がいる。また障がいが軽い子、重い子がいる中では同じ教室で同じ授業内容をしていても、声のかけ方や指導の仕方は変えていく必要がある。なにより一年生から三年生の全学年と一緒に生活しているため、学力差も生まれてくる。そんな彼らを平等にかつ一人一人ちゃんと見ることはそう簡単ではないと理解していたつもりだったが、いざ経験してみるとこんなにも難しいことだったとは生徒たちと接しなければわからなかっただろう。

今まで理想や知識だけで自分のなりたい教師像を考えていたが、実際に実習を行ったことで自分に足りないこと、勉強しなければいけないことを見つけることができました。その中でも一番自分に足りないと感じたのは、生徒は何ができるのかを見つけることである。できないことをできるように指導することももちろん大切だが、できることを褒めることが生徒にはとても重要なことでありモチベーションに繋がる。自分の足りないところを見つけることができたのはインターンで実際の現場に行き、経験することができたからである。今できることをたくさん経験し、自分の武器にし目標に向かって学んでいきたい。



# 未来塾

学生のみなさんの様々な学びを応援するために、人間開発学部の先生方が自主講座『未来塾』を開講します。自分の課題に応じて講座を選択することができます。今年度は、以下の講座を開講しています。

講座名・内容		担当	開講場所・期間
<b>高山真琴先生の</b> 1 教採・就職対策ピアノ講座 2 東京都公立幼稚園教採対策ピアノ講座	◆教員および保育士を目指す学生にグループ、個別指導で行います。 ◆東京都公立幼稚園を目指す学生に、クラス授業、グループ指導を行います。	高山真琴 教授	●1号館 音楽室・レッスン室
<b>原 英喜先生の</b> 講座1 泳ごう、泳げるようになろう！ 講座2 臨海学校見学と小遠泳体験 講座3 体育的、集団宿泊的行事としてのスキーを学ぶ	◆教員採用試験対策、指導者としての基礎的な水泳の能力向上を図ります。 ◆野外学習の現状の把握と実体験の場を提供します。 ◆教育や指導の現場に出たときに備えていたい実践力を養成します。	原 英喜 教授	●横浜国際プール他 6月～ ●千葉県南房総市他 8月に1泊2日 ●志賀高原スキー場 2月に2泊3日
<b>一 正孝先生の</b> 講座1 テニスの楽しみ方 講座2 オリンピックを学ぼう！	◆テニスの実習に加えて、用具、ルール、テニス大会の企画を学びます。 ◆古代・近代オリンピックを始め、オリンピックの情報を動画や資料で学びます。	一 正孝 教授	●テニスコート 体育館 3107、3207 金曜日or土曜日1限
<b>坂本正徳先生の</b> 講座 小学生が学ぶ「プログラミング」を体験しよう	◆個々のレベルに応じて内容を調整します。簡単なゲームを作ります。	坂本正徳 教授	●コンピュータ教室1 前期：月曜日5限 後期：金曜日4限
<b>石川清明先生の</b> 講座 保育と教材の研究	◆季節に応じた保育教材の製作を通して、子どもの発達過程や保育場面での扱い方を学びます。	石川清明 教授	●3309 週1回程度

## 平成28年度の予定をお知らせします

- 7月15日(金) 15:30～  
第1回教育インターンシップ連絡協議会
- 8月27日(土) 13:00～  
國學院大學教育実践総合センター  
第8回夏季教育講座  
「保育・幼児教育実践フォーラム」
- 10月30日(日) 13:00～  
共育フェスティバル
- 12月  
教育インターンシップ 報告会  
第2回教育インターンシップ連絡協議会

## 平成28年度の スタッフを紹介します

- ◆教育実践総合センター
- センター長 柴田 保之  
副センター長 高山 真琴  
担当 小笠原優子 銀杏 陽子  
唐沢はるみ 塩谷 香

教育実践総合センターの場所が変わりました。  
1号館1階、保健室の奥です。  
気軽にお寄りください。